

歴史館だより



大悲願寺本堂（東京都あきる野市横沢）

- 続・伊達政宗毒殺事件の真相
- 保春院殿四百年遠忌によせて
- 最上義光歴史館サポーター「義光会だより」No.13
- 研究余滴② 最上家の茶の湯

No.30
2023年3月発行



最上義光歴史館

続・伊達政宗

毒殺未遂事件の真相

佐藤 憲一

はじめに

伊達政宗毒殺未遂事件については、『歴史館だより Vol.6』（平成十一年三月発行）で「伊達政宗の母義姫」と題し論じたことがある。一九九四年に発見された虎哉和尚の手紙（文禄三年十一月二十七日 大有和尚宛 仙台市博物館保管）をもとに、伊達家の正史「貞山公治家記録」（元禄十六年 仙台市博物館所蔵）の義姫山形出奔の時期の誤りを指摘したものであった。同時に通説の根拠とされてきた「貞山公治家記録」の信憑性への疑問と事件の全面的見直しの必要性を述べたものであった。

その後、この事件について調査・研究を進めてきたが、その成果は「伊達政宗と母義姫―毒殺未遂事件と弟殺害について―」（『市史せんだい』Vol.27 仙台市博物館、二〇一七年九月）として発表した。その中で、東京都あき

る野市横沢（旧五日市町）にある真言宗の古刹、大悲願寺の伊達政宗書状（写真1）や過去帳などの資料をもとに、政宗毒殺未遂事件と弟小次郎殺害は、小田原参陣という伊達家存亡の重大局面を前に、伊達家の一本化（兄弟争いの根を断ち切る）を図り、小田原で政宗に万が一のことがあっても伊達家が存続できるように、政宗と母が共謀した偽装（狂言）ではないか、と述べた。母による毒殺未遂事件はなかったし、弟小次郎も生きていた可能性が高い、というのが結論である。

今回、歴史館より前回以降の研究成果を紹介してほしいとの要請があり寄稿することにした。『市史せんだい』発表と重複する部分があることをお許しいただきたい。

なお、義姫の名前については「貞山公治家記録」に拠って「義姫」として論を進めていく。一次資料で政宗の母の名前を確認できないためである。当

時は「お東」「お東様」と呼ばれていたようである。義姫自身も手紙に「ひがし（東）」と署名している。これは夫、伊達輝宗が隠居後「東」と称していたためだろう（注1）。これに対し政宗は家督相続前「西殿」と呼ばれていたようである（注2）。米沢城の輝宗と政宗の居所が東西に分かれていたことによるものだろうか。以上のことから、ここでは適宜「義姫」「お東」の呼び名を使用していきたい。

（注1）天正十二年極月吉日 伊達政宗宛伊達輝宗正月行事『伊達家文書』三一九号。「受心（伊達輝宗）」と署名し、「東より」「館（伊達政宗 へ）」とある。

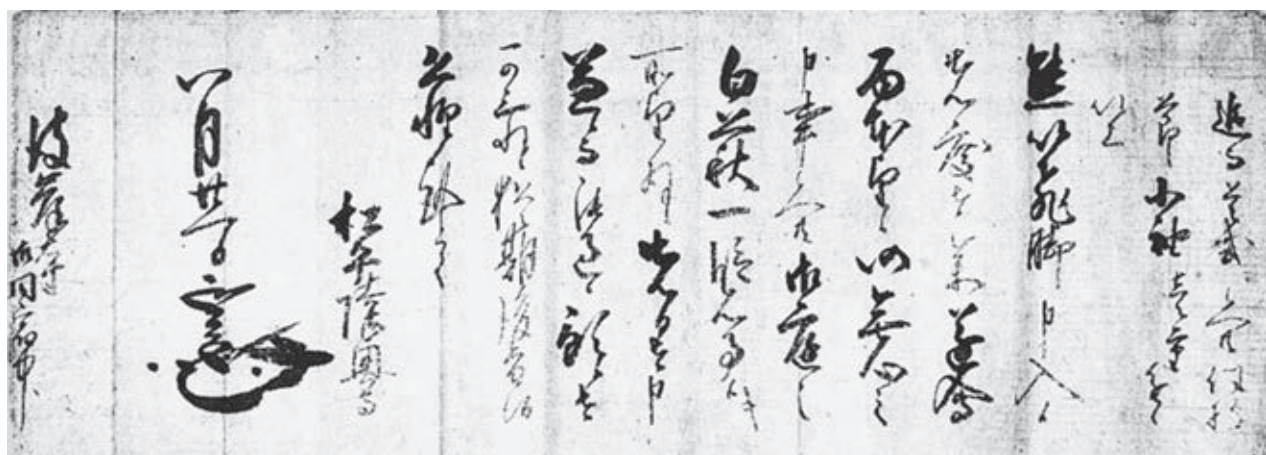
（注2）（天正十年）五月十一日付で伊達輝宗と同政宗に宛てた勝光寺正壽書状（『伊達家文書』三一六号・三一七号）を見ると、輝宗宛書状では宛所が「伊達殿 御陣所」とあるのに対し、政宗宛書状では宛所が「伊達西殿 御陣所」となっている。

事件を捏造したのは政宗本人である

松尾剛次氏は著書『最上氏三代』（ミネルヴァ書房、二〇二一年）の中で、前掲の『市史せんだい』の拙論を踏まえ「政宗毒殺未遂事件の話は事実ではない」「貞山公治家記録」が捏造した

話である」「毒殺未遂事件は伊達藩によって捏造された事件である」（二六頁〜二七頁）と述べている。言うまでもなく、捏造とは「事実でない事を事実のようにこしらえて言うこと」（『広辞苑』）である。事件が捏造されたものであることはその通りであるが、捏造したのは政宗本人であり、母義姫との共謀であったと考えられる。勿論、母による政宗毒殺未遂事件はなかった。政宗による弟小次郎殺害もなかった。手討ちにしたことにして寺へ逃した（出家させた）と考えられる。大悲願寺の十五代住職秀雄が小次郎本人である可能性が高い。

では何故このような事件を捏造したのだろうか。これを解く手掛かりとなる資料がある。事件直後に政宗が側近の鬼庭（後に茂庭）石見守綱元に宛てた書状である。全文は「貞山公治家記録 付録」に収録されている。その中で弟殺害の理由を将来内乱が起ることを未然に防ぐため、と述べている。つまり弟擁立の芽を摘んで伊達家の一本化を図るためであった。しかし、弟を殺しては小田原で政宗に万が一のこと（豊臣秀吉の命による切腹、打首など）があった場合、伊達家の血統が途絶えかねないおそれがあった。当時政宗に



(写真1) 伊達政宗書状

大悲願寺所蔵

(元和八年カ) 八月二十一日 大悲願寺宛

大きさ 縦18・5cm 横52・5cm

(追而書)

追而、是式二候へ共、任折

節、小袖^{寄置}進候、

以上、

態以飛脚申入候、

先度者参、遂会

面本望候、仍無心之

申事候へ共、御庭之

白萩一段見事候キ、

所望存候、先日者申

兼候而、罷過候、預候者

可忝候、猶期後音候、

恐惶謹言、

松平陸奥守

(元和八年カ)

八月廿一日 政宗(花押)

(大悲願寺海誓力)

彼岸寺

御同宿中

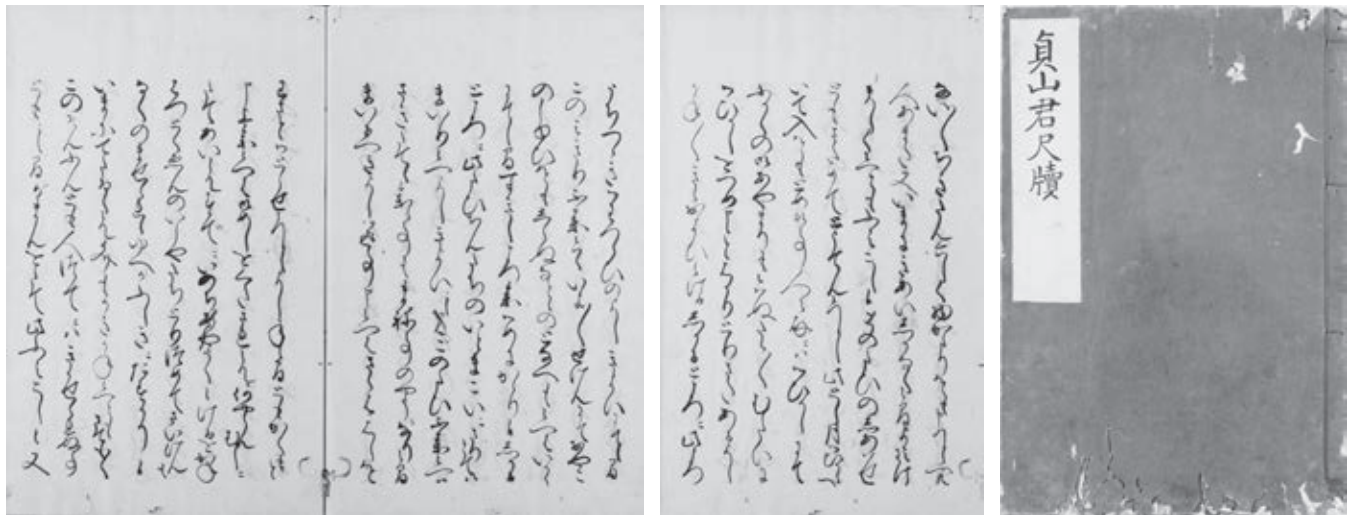
※伊達政宗が元和八年(一六三二)八月、大悲願寺を訪れ饗応を受けたとき、庭に咲く白萩の見事に心を奪われ、江戸に帰ってから使者を遣わして株分けを所望した手紙である。当時の住職海誓に宛てたもの。海誓は十三代住職で、政宗の弟とされる十五代住職秀雄の師である。

は実子がなく、長男の秀宗(後の宇和島藩主)が誕生するのは事件の翌年、天正十九年(一五九二)のことである。血統を絶やしかねないたった一人の弟殺害は考え難い。

鬼庭石見守綱元宛書状の検討

事件の直後、事件の経緯を側近の鬼庭綱元に知らせた政宗の書状については、これを偽書とする見解もあるが、書状が本物であることは『市史せんだい』で述べた通りである。この書状が佐沼亘理家(宮城県登米市迫町)に伝来した綱元宛政宗書状(亘理家の記録では一七五通あった)の一部であることは、松山茂庭家(宮城県大崎市松山)が江戸時代に作成した「貞山君尺牘」(茂庭宣元氏所蔵)によって明らかである。「貞山君尺牘」には佐沼亘理家伝来の綱元宛政宗書状十五点が写し取られており、この書状も入っている(写真2)。なお、この書状の原本は所在不明である。

書状の中で政宗は、膳に毒を盛ったのは御東(母)と思われ、皆が噂をしているように母が自分に替えて弟を擁立しようと企んでいること、このまま弟が成長すれば将来、弟との間に争いが生じることは確実であること、たと



(写真2) 伊達政宗書状(写) 「貞山君尺牘」(茂庭宣元氏蔵) より
年月未詳(天正十八年四月カ) 鬼庭石見守綱元宛

内々直談、詳しく物語をも申すべく候へ共、

人数多、又今に気合しかなく候間、読み分け

まじく候へども、文越し候。此度の仕合せ

ども、定めて動転候べく候。此年月は東へ^(義應)

出入りをも止め候事、人々存ふには、御東にて

不覚の御誤りも候はぬ、只々無体に

御東を詰め申し候とばかり取沙汰ある由、

かねぐ聞き及び候ひける。然るところに、此頃

打ち続き御煩ひの由御意にて候間、

この御参らず候はゞ、いよ／＼世間にて親子

の首尾をも知らぬなどの唱へも候へば如何

にて候間、過ぎし頃参り御目にかかり候。然る

ところに、此度陣立ちの暇乞ひに、さりとては

参り候へかし御意に候間、此度参らず候へば、

先立てて参り候事も真似事のやうになり候間、

参るべき由御返事申し候へば、さらば箸を

態と御取らせ申し候べく候由承り候間、ともかくもと

申し上げ参り候へば、御飯を下され候て、何やらん虫に

たてあい候て、既に命危うく候けるを、かね

撥毒田の医者達取り詰めて、際限も

なく飲ませられ候故か、不思議に助かり候。

今にてだるく候て、文も書きかね候へども、さても／＼

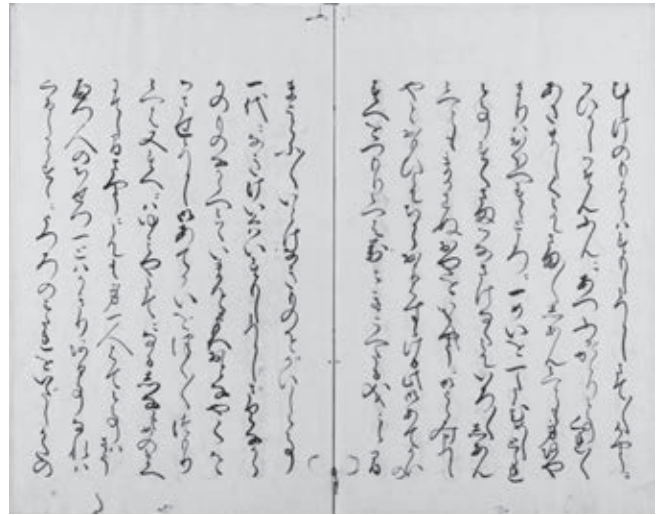
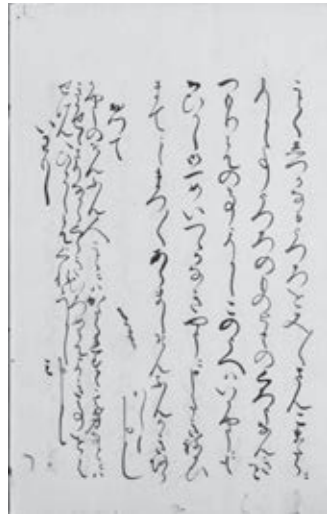
此の存分ども人伝には聞かせられぬ事

どもに候間、我慢をたて、此の文越し候。又、

え争いが生じて自分一人死ぬことは何でもないが、そうなれば今は平穏な洞(うつろ。領内)が又々珊瑚斑(さんごまだら。内乱)となり、家臣たちに苦勞・難儀をかけることになること、このため可哀そうだが止むを得ず弟を手討ちにしたこと、この上は母の命に別状がないよう願っていること、などを詳しく打ち明けている。そして、最後に「このような思い(胸の内)は、誰にでも話せることではない。そなたには話しておく。しかし、そなたの方で斟酌して、よいと思うことは世間へ口説き広めてほしい」と意味深長なことばで締め括っている。

政宗が言う兄弟対立への危惧が客観的にどれ程現実味を帯び、差し迫っていたかは不明である。小田原参陣という重大局面を前にした政宗の思い過ぎであった可能性が高い。ただ内乱への不安は、伊達家四代にわたる親子相克(十三代尚宗と十四代植宗、植宗と十五代晴宗、晴宗と十六代輝宗との間の親子相克)に見られる骨肉の争いへの警戒心から来していたのかもしれない。文中で「平穏な洞が又々珊瑚斑となる」(傍線筆者)と述べているのが、それである。

弟殺害については母との共謀がなけ



虫気の模様は推もじ候べく候。扱々、かやうに御東御存分にあつふかか、り候事、くれぐれ浅ましく候て、様々思案候へ共、身誤りは覚へず候ところに、一命を一度召し取られ候事、すぐさま御情けなく候て、いろ／＼思案候へども、紛わぬ親を如何様に御恨み申すべく候やと思ひ候て、力及ばず候ける。この御擬ひの術を積もり候へば、万々聞こへたる儀に候間、

誠に／＼稚き者を害し候事、

一代になきけいくハい、推もじ候べく候。さりながら

彼の者ながらへ候はゞ、今をさへ大人やくを

御させ候べく候、御擬ひをつく／＼積もり

候へば、又、末には弓箭になる品も目の前

にて候間、左様に候ても身一人果て候事は、惣

別人の大切、一度は限りある事なれば

苦しからず候に、洞の乱れを出だし、形の

ごとくの静かなる洞を又々珊瑚斑に

候べく候事、洞の者どもの苦勞・難儀を

積もり候ての事にて候。この上は、如何様にも

御東御一命恙なきやうに申したき願ひ

までに候。まず／＼、あらまし存分書き表

し申し候。かしく。

追つて、斯様の存分人ごとには語られず候。其の身などには

聞かせ候。さりながら、口説き広めてよき事をば、

世間へ響かし候てくれ候べく候。かしく。

(石文字)
いわもじ

之

※天正十八年（一五九〇）四月の毒殺未遂事件の直後に書かれたと推定される手紙。仮名書の手紙であるが、読み易いように漢字・仮名交じりに改めて掲載した。宛名の「いわもじ（石文字）」は鬼庭石見守綱元の「石見」の略。「之」は政宗のこと。

れば捏造は困難だろう。たった一人の弟を実際に殺したとしたら、どのような理由であれ、母は政宗を赦すことはなかったと考えられる。事件後の手紙、そして山形へ帰った母との間で、また最上氏改易後に仙台へ戻った母との間で交わされた二人の手紙を見る限り、親子の情愛、信頼は一貫してゆるぎないものであったと言わざるを得ない。

まとめ

結局、この鬼庭綱元に宛てた書状が事件を実際にあったこととして伝えることになった最大の原因だろう。政宗自身が語ることであり、誰も疑うことがなかった（出来なかった）。この書状以外にも「貞山公治家記録」が参考とした資料に「木村宇右衛門覚書」（晩年の政宗に仕えた小姓の一人、木村宇右衛門がまとめた伊達政宗の言行録。仙台市博物館所蔵）がある。その中でも政宗自身事件の経緯に触れ、弟を手打ちにしたと述懐している。「貞山公治家記録」の編纂者を含め、誰も疑う余地はなかったのである。

（伊達政宗研究家／元仙台市博物館館長）

保春院殿四百年遠忌によせて

保春院住職 三浦真人



この度、歴史館だよりに寄稿させていただくこととなりました。保春院住職の三浦真人と申します。ご縁をいただいたことに心より感謝申し上げます。

さて、保春院とは仙台市若林区保春院前丁に所在する臨済宗のお寺で、「少林山 保春院（しょうりんざん ほしゅんいん）」といえます。名称は義光公の妹である義姫さまの院号「保春院殿花窓久栄尼大姉」に由来しており、義姫さまの菩提寺になります。少林山とは、「少」には「少々若い」という意味があり、現在の宮城刑務所には政宗公が居住していた少林城（今は若林城と記載）がありました。その近くにあるお寺なので少林山の山号があるようです。伊達家の記録によると政宗公が一六二八年に建立を指示し、一六三六年に完成を見に来たと記載されています。義姫さまの菩提寺ではありませんが、墓所は寛範寺（仙台市青葉区北山）に所在しており、知らずに保春院に訪ねてこられる方も多くいます。墓所が

無い理由は一六二三年に逝去されたときに保春院がまだ無かったことと、寛範寺は夫である輝宗公の菩提寺であり葬儀を行ったお寺だからと考えられます。



今回義姫さまの四〇〇年忌を迎えるにあたり、菩提寺がすべきことを熟考した結果、ご遺徳を偲び後世へと伝えることが住職としての役目であり、参拝者が手を合わせるためのご尊像があると伝わりやすいとなり製作することになりました。当初は昨年の遠忌法要に合わせてご尊像の開眼法要を計画していましたが、製作する際に参考になる肖像画が現存していないことや、コロナ禍になり打合せが進まなかったこともあり、今年の没後四〇〇年に合わせて開眼法要を一年近く延ばすことで、その間はどなたでも参加できる鑿入れ式を開催することにしました。義姫さま

の歴史を調査する過程で最上義光歴史館さまにもご協力をいただいたしており、折角なので義姫さまが長く過ごされた山形市でも鑿入れを開催できないかと打診したところ、開催させていただくことができました。その際は、多くの方にご縁を結んでいただいたことに深く感謝しています。



さて、遠忌法要ですが、例年は義姫さまの命日である七月十六日に墓所のある寛範寺を会場に法要と墓参を行っていましたが、昨年の遠忌法要は保春院を会場に特別な対応で執り行わせていただきました。コロナ禍ではありましたが、丁度感染者数が落ち着いていた時期と重なったために、規模を縮小することなくご案内することができ多くの方々にご参列していただきました。当日は県内で大雨の被害があり予定していた記念講演は延期になってしまいました



が、裏千家業舩の先生による献茶や伊達武将隊の皆さんによる献舞とともに、関係寺院と法要を無事盛大に開催することができました。

ところで、統計によると日本には様々な宗派のお寺がコンビニ以上に存在していますが、一個人の供養をする為に建てられたお寺は少数になります。保春院も、義姫さまのために建てられているのでその少数派にあたります。そのようなお寺の住職として、創建の由来になった方に面識や血縁は無くともその方が存在しなければ今のお寺はありませんので、ただただ感謝するとともにその時代の檀信徒とともに供養を続ける必要があると思っています。

最後になりますが、今回四〇〇年遠忌を迎えるにあたり多くの方々とともに法要の時間を共有できたことは、その時代に住職を預かった巡り合わせのご縁に感謝するとともに、より一層身が引き締まる経験となりました。令和五年十月にはご尊像の開眼法要を行う予定ですが、これからの四〇〇年を見守っていただけるように義姫さまのご遺徳を後世へ伝える環境を整え続けることが保春院住職の使命であり、次代の住職にも引き継ぐ必要があると思っています。開眼法要以降は普段からお参りできるように検討していますので、仙台にお越しの際はぜひお立ち寄りください。

義光会だより

No.13
2023年3月



題字 齋藤蕉石

コロナ禍の中で研修再開

まだまだコロナが猛威を奮っていますが、令和四年の昨年は、それまで開催を見合わせていた様々なイベントが少しずつ実施の方向へと見直されてきた年でした。

最上義光歴史館サポーターの活動も同様です。サポーターの会『義光会』メンバーの企画による研修が再開され、充実した活動となりました。テーマは「六十里越街道と出羽三山詣り」「本沢地区の歴史と寺院巡り」「山寺立石寺と最上氏について」です。古くから人々の暮らしが信仰と結びつき、それを大切に祀り守ることで地域の活性化や発展につなげてきたこと、宿坊や店が大いに賑わったこと、遠く離れた土地の文化や情報が運ばれてきたこと等を学ばせていただきました。支えてきた人々の逞しさや風土を考えるいい機会となりました。また本沢地区では最上軍の戦いの場に足を運び、陣の配置や周辺の環境を確認しながら探索しました。土地の高低差や水源地などの地理条件の情報収集、そしてその活用が合理性に基づいたことを目の当たりに

しました。壮絶な戦いの後には農民たちが墓をつくり死者を弔ったことで史跡として残り、現在に至っています。立石寺では不滅の法灯に、清源寺では歴史館の創設に深く関わった片桐繁雄先生と江戸初期に長谷堂城主となった坂紀伊守の墓に花を手向け、手を合わせました。

これらの活動に当たっては、住職の皆様や地域のボランティアなど外団体など外部へ協力依頼をしました。加えて義光会の仲間からも講師を引き受けてもらいました。担当した皆様の地道な探求に



より豊富な知識の蓄積、細やかで分かりやすい資料の提示、その発信力に驚かされました。お礼申し上げます。

多様な発信を！

歴史館の研修の再開のみならず、山形市でもイベントが再開され、義光会も参加させていただきました。「山形まるごとマラソン」・「山形街なか賑わいフェスティバル」です。

マラソンではランナーを霞城公園の北不門門で迎えて応援しました。その際戦国武将の衣装を着用するのですが、兜と鎧には用途に合わせ多くの部品があり、着付けは複雑でした。紐で結ぶにも順序や力の加減など知識が必要です。甲冑を身にまとう武将の凛々しい姿・安全の陰には、着脱の際の手助けが不可欠のだと分かりました。大河ドラマ「どうする家康」が一月から始まりましたが、徳川家康が着用した金蛇美具足がさっそく出てきました。役者さんも一度着用すると自由がきかないこと、汗だくも覚悟の演技なのだと察します。

歴史館には最上義光が織田信長から頂いた兜が大切に公開してありますが、重さが約三キロです。鎧も戦国武将の活躍した当時は二十キロほどあったということです。歴史館では令和五年の企画展示に兜や鎧を予定しています。型式や素材が時代によって変化していくことを来館して確かめていただきました。

と思います。

フェスティバルでは久々の歩行者天国となり、市民のみなさんがたくさん参加してくださいました。

クイズのスタンプカードを手渡す際に、「七日町の通りを作った殿様が最上義光公です。四百年前からこの通りが残っているのです。」などと業績を伝えると、感心したり驚いたり反応が返ってきました。テント内のパネルの展示物に興味を示し、歴史館への来訪を約束してくださる方もいました。三年ぶりのフェスティバルは情報発信に有用な体験でした。

コロナという想定外の状況から令和五年度は一変して通常の活動へと戻ることを期待します。たくさんの方に来館していただき、多くの発信をしたいです。

(小山田奈穂子)



最上家の茶の湯

渋谷洛雲斎

「茶人にあらずんば戦国武将にあらず」。これは拙者架蔵書の帯にある宣伝文句だ。随分と大仰な物言いだが、当時の状況からすれば概ね首肯できる。すなわち、天下人・信長・秀吉・家康・秀忠による「御茶湯御政道」「数奇屋御成」などの施策により、多くの武将が深淺あれど茶の湯に関心を持ったことは想像に難くない。事実、彼らの多くが天下一宗匠の千利休や古田織部の門を叩いている。周知の如く屈指の連歌巧者であった義光。その子家親は家康・秀忠の側近だった。よって、茶の湯の場合も史料僅少と言えども例外ではなかったと史料する。以下、標記について管見の限りだが愚考を述べてみたい。

先ずは、山形城三の丸跡双葉町・城南町遺跡の出土品に注目。黒織部市松文沓形茶碗・白天目茶碗・志野茶碗などが出土している。拙者は茶道執心者としてかつてこれらの品々を興味深く実査したが、個々の作風や関連事項などについては紙面の都合上割愛する。ただ、少なくとも当時の最上家臣に茶の湯を嗜む武人がいたことが明らかになった。

次に家親所蔵の茶人が挙げられる。元和三年（一六一七）家親死去、同五年源五郎家信が家督相続。その時に、父家親の遺物として「唐肩衝」茶入を幕府に献上している（『最上家譜』『同家伝覚書』）。これは中国からの舶載の焼物で、わが国では唐物と呼ばれ珍重された。肩衝とは茶入の形容である。

後に「最上肩衝」と銘された本品は、名物として下賜・献上などを繰返し流転

を重ねていったと思われる。現在は存否不明。妄想だが別銘で存在か？

ちなみに、「天下三肩衝」という名物茶器がある。「初花」「檜柴」「新田」と銘する茶入で、そのすべてが権力者の秀吉から家康に渡っている。もとより、名物茶器の蒐集は足利義政が先行し知られているが（東山御物）、度重なる戦乱によつて散逸した茶器その他を「名物狩り」をして再蒐集し、茶之湯政道に利用したのが織田信長である。その政治手法を引き継いだのが秀吉であり、また家康であつた。彼らは名物茶器を使って事あるごとに茶会を催している。このことにより、大名家をはじめ武家・公家・豪商などの名家の間に茶の湯が盛行した。茶の湯は当時のコミュニケーション・ツールの最たる文化芸道であつた。

こうした事例から類推すると、冒頭に述べたように最上家においても社交的教養の域を出ないにせよ茶の湯には無関心でいらなかったに相違ない。さらに言うと、義光の連歌における連衆が明らかになっているが、その中に茶の湯を嗜む人物が確かにいる。例えば、連歌の師里村紹巴は堺の豪商で信長・秀吉の茶頭だった津田宗及と親交があつたし、細川幽斎（玄旨）や大納言日野輝資、それに豊臣の五奉行前田玄以や黒田如水などである。堺の豪商灰屋承由も茶人だ。さて、ここにて残念だが今回の紙面は間もなく尽きようである。秀吉・家康と義光との茶の湯をめぐる直接史料は今のところ見当たらない。だが、演繹的に考えれば蓋然性はけっこう高いと見られる。彼ら天下人の義光に対する茶室での「おもてなし」がきつとあつたものと推定される。これは永年茶の道を歩んできた拙者の肌感覚とでも言っておこう。

令和5年度事業

1. 展示事業

(1) 常設展示

当館の収蔵品を主に、最上家関係資料と山形城関係資料等から選定したものを常設展示して紹介するとともに、3テーマで特設展示を行います。

① 特設展示 第一部

「鐵」[Kurogane]の美 2023

4月5日～17月30日

② 特設展示 第二部

「武士の晴れ姿」～甲冑と戦の様相～

8月2日～11月26日

③ 特設展示 第三部

「仮称」山形城下絵図展

11月29日～3月

2. 普及啓発事業

(1) 歴史講座

① ことも講座（小学校出張講座）

山形市内の小学校に出向いて最上義光を学ぶ機会をつくり、郷土史に対する関心と理解を深め、愛郷心の育成を図ります。

(2) ボランティアに係わる事業

最上義光と最上家を啓蒙することについて歴史館とともに活動する市民が、ボランティアという形で歴史館のサポーターとなって、来館者の多様化するニーズに応え、きめ細かなサービスの提供を図るとともに、歴史館を核としたコミュニティを創出します。（年一回サポーターを募集します）

・「義光塾」

・「現地研修会」

※詳細については最上義光歴史館にお問い合わせください。

表紙の写真

大悲願寺本堂（東京都あきる野市横沢）

このたび、最上義光の妹で伊達政宗の実母である保春院（お東の方／二四八八～一六三三）の四〇〇年忌（没後三九九年）を記念して、「四年ぶりに「伊達政宗毒殺未遂事件の真相」について佐藤先生に続編をご執筆いただきました。先生はすでに平成二九年に『市史せんだいvol.27』でこの研究成果を発表されていますが、多くの山形市民の要望により続編というかたちでお願いし、ご寄稿いただきました。大悲願寺はあきる野市横沢（旧五日市町）にある真言宗の古刹です。この十五代住職秀雄は、寺の記録によると「伊達輝宗の二男で、伊達政宗の弟」とあります。また、寺には元和八年（一六二二）八月二十一日大悲願寺に宛てた政宗の手紙も残っています（3ページ参照）。秀雄が政宗の弟小次郎ではないか、とするのが佐藤先生の見解です。

ご利用について

開館時間 午前9時から午後4時30分

入館料 無料

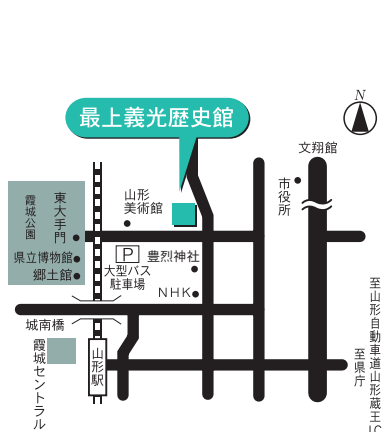
休館日 月曜日（国民の祝日となる場合はその翌日）

12月29日から1月3日

交通 JR山形駅より徒歩約15分

大手町バス停留所より徒歩1分

来館案内図



令和5年3月発行
編集・発行 公益財団法人山形市文化振興事業団

最上義光歴史館
〒990-0004
山形市大手町1-153

TEL 023-1625-1153
FAX 023-1625-1100
http://mogamiyoshiaki.jp

印刷 株式会社大風印刷

